

看護大通信

〈 89 〉

看護大学では、臨床実習という科目で学生と教員は、病院や施設などで

県立看護大学 老年看護領域 准教授

城戸 裕子

実際に患者さんや利用者の方と接する機会があります。

「いくらいいです」

と何気なく言葉にしました。

医療の現場は、たくさんあると思います。人が言葉はその時には目に見えないかと思えます。発した言葉も時に医療者側に大きな創(きず)をつくることもあると思います。言葉は側から発せられた力や信頼、安心や希望を生み出していくのではな

言葉の持つ力

医療を受ける側から発せられた力や信頼、安心や希望を生み出していくのではな

いかに思えます。発した言葉は側から発せられた力や信頼、安心や希望を生み出していくのではな

た患者さんとの会話で印象に残ったことがあります。

「そんなもったいないよ。医療者側が投げかけた言葉はさまざまです。励まし、悲しみや痛みを支える、時には厳しさの言葉もありませ

す。朝、学生の受け持ち患者さんの病室にごあいさつに伺いました。その際、

「そんなもんだから、あんたが大切にしなきゃ」とい

患者さんから「先生はい

表情と一緒に返ってきた。元気を差し上げるなどというのは私自身の驕(おご)りであったことをとっさに恥ずかしく思うと同時に、自分自身の言葉の鈍感さに気づきま

側から発せられた一言が誰もが前向きになれるような魔法の言葉はないのかもしれないが、その時その時に心や辛(つら)さを支える魔法の言葉があるような気がします。丁寧である、思いやりがある、あたたかである、そんな言葉から人は治る力や信頼、安心や希望を生み出していくのではな

常には思いません。

第1日曜掲載